

2017/06/18

「迷い出た羊」

イエスが言われた譬えに、『99匹と1匹の羊』がある。羊が100匹のいたはずなのに1匹足りなかったので、羊飼いは迷い出た羊を探しに行き、大喜びするという話だ。今回は、この譬えの意味について考えてみたい。尚、御言葉の引用は記載のない限り新改訳聖書第三版を使用する。では、イエスがこの譬えを話されるきっかけとなった出来事から見てみよう。

● イエスへのつまずき

イエスの話を聞こうと、そこには多くの人たちが集まっていた。ただし、集まった人たちは卑しい者とさげすまれていた取税人や、周りからは罪人と呼ばれていた人たちであった。イエスは、そんな彼らを受け入れ一緒に食事までしていた。かつてイエスは、「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです」(ルカ 5:31-32)と言われたことがあったが、イエスご自分の言葉どおりに罪人を歓迎し受け入れていたのである。

ところが、自分たちは正しい人間であって、罪人とは違うと自負していたパリサイ人や律法学者たちは、そんなイエスの様子を見て激しくつまずいた。

「さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」(ルカ 15:1-2)

そこでイエスは、どうして罪人を招き入れるのか、その理由を譬えで話された。それが、『99匹と1匹の羊』の譬えであった。

● 『99匹と1匹の羊』の譬え

「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの1匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった1匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」(ルカ 15:4-7)

イエスは罪人を迎え入れるご自分の姿を「羊飼い」に譬え、罪人は「迷い出た羊」ゆえに歓迎して受け入れていることを話された。さらにイエスは、羊飼が「迷い出た羊」を探しだし、本来の「居場所」に連れ戻す様を、「罪人が悔い改める」ことに重ねられた。このことから、聖書が言う「悔い改める」とは、「神に立ち返る」ことを表した言葉だと分かる。日本語の「悔い改める」だと自分の過ちを認め反省するという意味になるが、聖書にある「悔い改める」は、あくまでも「迷い出た羊」が本来の「居場所」に戻ることを言っていることが分かる。

ちなみに「悔い改める」と訳された言葉は「メタノエオー」[μετανοέω]である。これは「悔い改め」とも訳せなくはないが、「メタノエオー」は旧約聖書にある「シューヴ」[שוב]をギリシャ語に訳す際に使われた訳語なので、「メタノエオー」に込められた意味は「シューヴ」を見なければならない。それは「立ち返る」という意味であって、そこには反省するとか悔やむとかいう意味は全くない。なぜこのことを説明するかというと、多くの人には「悔い改める」の意味を勘違いしているからだ。本来そこにある意味は、あくまでも神のもとに「立ち返る」である。そして、神に立ち返ることは『99匹と1匹の羊』の譬えからも分かるように、自分を探し出してくれる羊飼いがいるから可能となる。羊飼いである神が差し伸べる御手があって初めて可能になる。したがって「悔い改める」とは、神の御手を掴むことであり、神に助けを乞うことであり、神のあわれみにすがることを意味する。そのことを押さえておかないと、「迷い出た羊」が神のもとに連れ戻される時の実際が何も見えてこない。

さて、イエスはこの譬えで罪人を招き食事することの理由を明らかにされた。それは、この罪人たちは「迷い出た羊」であるからだという。「迷い出た羊」が神のもとに立ち返った（悔い改めた）ので彼らを迎え入れ、こうして一緒に食事をしているという。このことは神にとって大変重要なことなので、これに関連する譬えをさらに続けて二つ話された。『銀貨10枚の譬え』と『放蕩息子の譬え』である。どれも、罪人が神のもとに立ち返ることを神がどれほど喜ぶかを教えた内容になっている。イエスは、こうした譬えを通してご自分の来られた目的を明らかにされた。それは、罪人を連れ戻すためであると。

● 神が来られた目的

多くの人には、神の仕事は罪人を見つけ裁くことだと思っている。それは全くの誤解であり、罪人を見つけ、その者を連れ戻す（救う）ことが神の仕事である。そもそもキリストを信じていない罪人は「神の国」に行けないので、そういう意味ではすでに裁かれている。「信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている」(ヨハネ 3:18)。ゆえに、罪人を裁く必要など全くない。罪人に必要なのは救いしかない。このことはとても重要なので、イエスは先に見た譬えだけでなく、実際の話としても次のように語られた。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」(ヨハネ 12:47)

神がイエスとして来られた目的は、このように罪人を裁くためではなく救うためであった。罪人は「迷い出た羊」であり、イエスは彼らを元の「居場所」に連れ戻すために来られた。では、一体誰が「迷い出た羊」なのだろうか。一体誰が、神の目には「罪人」なのだろうか。そのことを知ることができる御言葉がある。

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。」(ローマ 3:10-12)

この御言葉は、全ての人は迷い出ている、神を求める者など一人もいないと断言する。このことから、イエスの言われた「迷い出た羊」とは、全ての人を指していることが分かる。全ての人を神のもとから迷い出た羊であり、「行い」に関係なく「罪人」と見なされている。それはどういうことなのか、詳しく見てみよう。

● 「迷い出た羊」の正体

その昔、アダムの犯した罪により、人は神との結びつきを失ってしまった。これを「死」というが、その「死」は全ての人に及んだ。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ 5:12 新共同訳)。人は生まれながらに神との結びつきを持たない者となり、神に愛されている自分が見えなくなってしまった。さらには永遠には生きられなくなり、朽ちる体となった。

それは、人の心に言いようもない「不安」をもたらした。というのも、人は神の器官として造られていたので、「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです」(I コリント 12:27)、神との結びつきを失ってしまえば「不安」を覚えて当然であった。その「不安」は自分の「居場所」が見えなくなったことによって生じたものであり、人は生まれながらにそうした「不安」を覚えるようになった。

そこで人は「不安」から逃げようと、人の中に自分の「居場所」を求めた。誰もがこぞって安心できる「居場所」を人の中に探し求めた。どこかに同情してくれる人はいないか、慰めてくれる人はいないか、ほめてくれる人はいないか、関心を持ってくれる人はいないかと探し歩いたのである。

しかし、いくら探そうとも、無条件で自分を愛してくれる人などはいなかった。だから、安心できる「居場所」を確保するには、少しでも愛される努力を必要とした。ここに愛されるための競争が勃発し、互いを比べ合うようになった。そこから、嫉妬や争いが生じるようになった。それは人を苦しめたので、人はその苦しみから逃れようと快樂をもむさぼった。私たちを苦しめる罪は紛れもなく、神との結びつきを失ったことによる「死のとげ」であった。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。人の中に罪を犯す性質があったわけではなかった(参照：福音の回復(34))。

こうして、人の中に自分の「居場所」を求めることが私たちの生き方の基本となった。その生き方は神など求めないで、いつも自分が良く思われることを優先する。これは言うまでもなく御心に逆らった生き方なので、神の目からすると罪の何ものでもない。まことに人は立派な「罪人」となった。それで聖書は、「神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった」(ローマ 3:11-12)と教えている。「迷い出た羊」とは、まさしく私たち全てを指している。イエスは、そんな私たちを連れ戻すために来られたと言われたのである。ならば、そのことを具体的に見てみよう。

● 何度も探し出してください

私たちはキリストの部分である。「私たちはキリストのからだの部分だからです」(エペソ 5:30)。キリストこそが私たちの「居場所」である。にもかかわらず、神との結びつきを失う「死」が入り込んだために、私たちは人の中に自分の「居場所」を求めるようになってしまった。全ての人は迷い出た羊となり、「罪人」になった。

そこでキリストは、迷い出た羊を連れ戻すために来られた。その結果、私たちは神のもとに戻ることができ、キリストの中に自分の「居場所」を得た。要は悔い改めることができ、キリストを信じるクリスチャンになれた。しかしクリスチャンになっても、その体は人の中で暮らしているため、どうしても人の中にも自分の「居場所」を求めてしまう。あの『放蕩息子の譬え』に登場する放蕩息子も、神を象徴する父親がいる場所を「居場所」として暮らしていたが、この世に自分の「居場所」を求め出て行った。あの放蕩息子は、まさしく私たちクリスチャンの姿でもあった。そうすると、クリスチャンは再び「迷い出た羊」となるので、神は再び探し出し連れ戻してください。再び悔い改めへと導かれる。

つまり、私たちは地上で暮らす限り、どこまでいっても「迷い出た羊」になってしまうのである。ゆえに聖書は、「すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった」(ローマ 3:12)と教える。だがキリストは、そんな私たちを何度でも連れ戻してくださいという。何度でも悔い改めへと導いてください。だからイエスは、「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい」(黙示録 3:19)と言われた。そして連れ戻される度に(悔い改める度に)、本当の「居場所」はキリストだという実感が増し加わっ

ていき、「平安な義の実」（ヘブル 12:11）を結ばせていく。これを「罪が洗い流されていく」といい、「聖められる」という。ならば、神はどのような手段で以て「迷い出た羊」を探し出してくれるのだろうか。その手段を見てみよう。

● 「迷い出た羊」を探す手段

神は人に、自らが選択する「意志」を持たせた。そのため、人の「意志」を無視し、強制的に何かするという事はされない。されないというより、それは神の愛に反するのでできない。神がされることは、あくまでも救いの御手を差し伸べ、呼びかけることまでである。あとは人の「意志」にゆだね、救いの御手に掴まるのを待たれる。神はそうやって人を連れ戻そうとされる。その際、人が救いの御手に掴まるのが「神に立ち返る」ことであり、それを日本語の聖書は「悔い改める」と言っている。

ところが人は、神が救いの御手を差し伸べても掴まろうとはしない。自分は正しい人間であり、神の助けなど必要ないと思うからだ。そこで神が執られる手段がある。それこそが、「迷い出た羊」を探し出すための手段となる。その手段は大きく分けて二つある。一つは「神の律法」を使うことだ。「神の律法」が書かれた聖書を使い、全ての人を罪の下に閉じ込めることで罪の赦しが必要だと気づかせ、救いの御手に掴ませようとされる（悔い改めに導こうとされる）。「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。…… こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました」（ガラテヤ 3:22-24）。

しかし、この手段が有効に働くのは「神の律法」に従おうとする者だけなので、神には二つ目の手段があった。それは、人に襲いかかる患難を静観することだ。静観することで、神の助けが必要な自分に気づくのを待ち、救いの御手に掴ませようとされる（悔い改めに導こうとされる）。ただし、ただ患難を静観して待つだけではなく、ありとあらゆるチャンネルを使い、神に助けを乞うよう呼びかけもされる。その実際を、ヨブの話から見てみよう。

● 患難がヨブを襲う

その昔、ヨブという人がいた。彼は神を信じ、潔白で正しい人であった。「ウツの地にヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた」（ヨブ 1:1）。そんな彼に、信じがたいほどの患難が襲う。その患難は全てサタンからであったが、神はそれを静観された。「【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」」（ヨブ 1:12）。

最初に押さえておきたいのは、ヨブ記にもあるように、患難は神からでは決してないということだ。それは悪魔からであり、正確に言うと、悪魔の仕業による「死」が原因で起きる。なぜなら「死」によって人は罪を犯すようになり、「死のとげは罪であり」（I コリント 15:56）、

人は様々な困難な問題を引き起こすようになったからだ。さらには「死」によって被造物全てが滅びの束縛を受けるようになり、「被造物自体も、滅びの束縛から…」(ローマ 8:21)、被造物は様々な「病気」や「天変地異」を引き起こすようになったからだ。それらが人に襲いかかる患難であって、全て悪魔の仕業による「死」に起因している。神はその患難を逆手に取り神のわざが現れるときとされるのであって、患難は神からでは決してない。では、引き続きヨブ記を見てみよう(参照：福音の回復(36))。

平穏な日々を送っていたヨブのもとに知らせが入った。ヨブの下で働いていた人たちが殺され、ヨブの財産が奪われてしまったというのである。さらにはヨブの子どもたちが食事をしていると大風が襲い、みな死んでしまったという知らせも入った。それでもヨブはつぶやかなかった。神をほめたたえ、自分の「居場所」は神にあることを確認した。「ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった」(ヨブ 1:22)。

すると今度は、悪性の腫物ができるといふ患難がヨブを襲った。それでもヨブは罪を犯さなかった。しかし、腫物はひどくなり、ヨブの顔かどうかも分からなくなった。その苦しみの中、ヨブはついにつぶやいた。「その後、ヨブは口を開いて自分の生まれた日をのろった」(ヨブ 3:1)。生まれた日をのろうことで、自分を造った神を間接的に批判したのである。そうすることで自らを正しいとし、神に助けを乞う「悔い改め」を拒んだ。その後も、ヨブは友達とのやりとりの中で自らの正しさを主張した。

「そうだ、神はわたしを殺されるかもしれない。だが、ただ待つてはいられない。わたしの道を神の前に申し立てよう。…………… 罪と悪がどれほどわたしにあるのでしょうか。わたしの罪咎を示してください。」(ヨブ 13:15-23 新共同訳)

ここでヨブのしたつぶやきこそ、すなわち自分を正しいとする主張こそ、私たちが患難に襲われるときにしてしまう行動にほかならない。というのも、私たちは患難に遭い耐えがたいほどの苦しみを覚えると、その苦しみを誰かのせいにし、自分を正しいとするからだ。そうすることで人の関心を自分に向けさせ、同情やあわれみを乞おうとする。これが、人の中に自分の「居場所」を求めようとする事の実際であり、人の罪にほかならない。ヨブは患難に遭ったことで彼の中に潜んでいた罪が表に現れ、実は今でも「迷い出た羊」であったことが露呈したのである。私たちが患難に遭うことで初めて罪に気づき、「迷い出た羊」であったことを知ることになる。ならば、神はそんなヨブにどうされたのだろう。

神はヨブの患難を静観するだけで、助けることはされなかった。しかし、神は、ヨブが自分の「居場所」を神以外に求めてしまう罪に気づけるよう、人を通して救いの御手を差し伸べられた。エリフの心に願いを起こさせ、彼の口を通してヨブが罪に気づけるよう助けられたのである。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だからである」(ピリピ 2:13 口語訳)。神はただ

患難を静観するだけでなく、ヨブが悔い改められるよう、ヨブの友達を使い呼びかけられた。同様に、神は私たちに襲いかかる患難に対しても、ただ静観されるだけではない。ありとあらゆるチャンネルを使い、悔い改めができるように（神の「居場所」に戻れるように）働きかけてくださる。

さて、ヨブの場合、それでも罪に気づかなかった。自分を正しいとし、「迷い出た羊」のままであった。そこで神は、ヨブの心に語りかけた。

「わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。…」(ヨブ 38:4)

自分を正しいとし神を非難するヨブに対し、神はさらに語りかけた。「非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それを言いたててみよ」(ヨブ 40:2)。ついにヨブは、自らの愚かさに気づき、恐れ多くも自分は神と戦っていたことを認めることができた。「ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましよう。私はただ手を口に当てるばかりです」(ヨブ 40:4)。それでも神は、「自分を義とするために、わたしを罪に定めるのか」(ヨブ 40:8) と言い、ヨブにとどめを刺された。こうしてヨブは、どうしようもできない罪に気づき、神に助けを乞うたのである。神の前で灰をかぶり、神に立ち返ることができた。

「それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています。」(ヨブ 42:6)

これこそが神に立ち返る「悔い改め」であり、神にしてみると、「迷い出た羊」を連れ戻した瞬間を意味する。それゆえ神は大いに喜び、彼を大いに祝福された。「【主】はヨブの繁栄を元どおりにされた。【主】はヨブの所有物もすべて二倍に増された」(ヨブ 42:10)。その出来事は『放蕩息子の譬え』の中で、帰ってきた息子を喜んだ父親が彼のために宴会を開く様子を彷彿とさせる。神の喜びはそのままヨブの心に「平安」となって届き、彼の心を支配した。ヨブは、何があろうとも自分の「居場所」は神であることをさらに強く知ったのである。これが、「迷い出た羊」を探し出す神の実際となる。

● 神の喜び

このように、この世界でどんなに正しいとされる人であっても、神を信じるクリスチャンになっても、自分の「居場所」を人の中に求めてしまう「迷い出た羊」である。人から良く思われようと、「この世の心づかい」(マタイ 13:22) に生きてしまう。だから神は患難を静観し、同時に神により頼むことができるよう、救いの御手を差し伸べてくださる。

あのペテロも、イエスが捕らえられるという患難に遭遇することで初めて、どうにもならない「この世の心づかい」という罪に気づいた。周りから良く思われようとする「この世の心

づかい」から、イエスを知らないと言ってしまったのである。そんなペテロを、イエスはただ静観するのではなく、時を見計らって救いの御手も差し伸べられた。イエスは振り向いて、ペテロを見つめられたのだ。「主が振り向いてペテロを見つめられた」（ルカ 22:61）。目は口ほどにものを言うというが、イエスはペテロに、「それでも私はお前を愛している」という思いを伝えられた。そのことで、ようやくペテロは神に立ち返ることができた。これこそ、「迷い出た羊」を連れ戻す実際である。

聖書は、「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった」（ローマ 3:10-12）と教えているように、救われてクリスチャンになっても人の中で暮らす以上、あのヨブやペテロのように再び迷い出てしまう。だからといって、救いが取り消されるということではない。迷い出たからといってもキリストを信じている以上、その者は「永遠のいのち」は持っている。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」（I ヨハネ 5:13）

一端、神の中に自分の「居場所」ができたなら（神と接ぎ木されたなら）、その肉が迷い出たからといっても救いが取り消されることはない。ただし、迷い出ることで人は苦しむ。そこで神は、何度でも連れ戻してくださる。そのことで、神の中の「居場所」の心地よさにますます気づけるように、「平安な義の実」を結ばせてくださる。そこには人の罪を見て裁く神などいない。迷い出た「罪人」が神に立ち返るのを、ただただ喜ばれる神しかおられない。

「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」（ルカ 15:10）

神の喜びは、まさしく私たちが罪に気づき、神に助けを乞うことにこそある。私たちが自分の重荷に気づき、それを神のもとに持って行くことを最大の喜びとされる。ゆえにイエスは、私たちにこう語りかけられた。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

『99匹と1匹の羊』の譬えは、そうした神の喜びを教えている。